

2020年11月28日

待降節第一主日

菊地功大司教 メッセージ

誰ひとりとして、この世界で永遠に生き続ける者はいない。それをわたしたちは知っています。さまざまな人生を、さまざまな時間のスパンの中で生きていくとしても、すべての人に必ず終わりがやってくる。ただ、その終わりのときは遙か彼方だと思い込んでいるにすぎません。

同時に、自分に与えられた時間には限りがあることを知っているからこそ、自分が生きている間には困難が起こらないようにと、問題を先送りすることもしばしばあります。とりわけ問題の解決に乗り出したときの負のインパクトが大きければ大きいほど、解決を先延ばしにしようとしています。

まるで時間が困難を解決してくれるのだと言わんばかりに、問題への取り組みを先送りして、今のこの刹那を安楽に暮らそうと考える誘惑があります。確かに、以前は治療が困難であった難病にも、時間の経過と共に新しい薬品や治療法が開発され、過去には不治の病であったものが、今や治癒可能となった例も少なくありません。現在の新型コロナウイルス感染症にしても、時間が経過すれば、何らかの解決法が見いだされると信じています、実際には何の根拠もありません。仮にそうであったとしても、それは単に無為に過ごした時間の積み重ねが問題を解決するのではなく、その間に注ぎ込まれた多くの専門家の地道な研究や努力の積み重ねの結果であります。普段からの地道な積み重ねがないところには、いくら時間を費やしたとしても、新たな変革は訪れません。未来の光のためには、困難な中にあっても常に地道な努力の積み重ねを怠ってはなりません。

教皇フランシスコは回勅「ラウダート・シ」において、「もはや、世代間の連帯から離れて持続可能な発展を語ることは出来ません」と指摘されました。(159)

教皇はより良い世界を実現するためには、刹那的な自己中心の考え方だけではなく、共通善に基づいて、将来世代への責任も視野に入れよと説いて、次のように指摘されます。

「わたしたちがいただいたこの世界は後続世代にも属するものゆえに、世代間の連帯は、任意の選択ではなく、むしろ正義の根本問題なのです。」(159)

その上で教皇は、「わたしたちは、後続する世代の人々に、いま成長しつつある子どもたちに、どのような世界を残そうとするのでしょうか。・・・どのような世界を後世に残したいかと自問するとき、わたしたちはまず、その世界がどちらに向かい、どのような意味を運び、どんな価値があるものなのかを考え」なければならないと指摘されています。

(160)

わたしたちには、どのような世界を後世に残していくのかという先送りすることの出来ない課題があります。その課題は、この世界で生きる意味をあらためて問い直す、言うならば結構しんどい挑戦、すなわち生き方の見直しという問いかけに直面することを求めています。

教皇は現在のパンデミックの状況の中で、未来を見据えて連帯するようと、こう呼びかけられます。

「現代における連帯は、パンデミック後の世界に向けて、また、わたしたちの人間関係や社会の病のいやしに向けて、たどるべき道です。それ以外に道はありません。連帯の道をたどるか、事態を悪化させるか、どちらかです(9月2日の一般謁見)」

「目を覚ましていなさい」という主の呼びかけは、単に覚醒していること自体を指すのではなく、未来を見据えて、今を生きるわたしたちが、将来世代との連帯の中で、被造物の管理を任された僕としての責任ある行動をとるように求めています。現実社会において世界的な連帯は、まだ夢物語であります。地道に、連帯の必要性を呼びかけ、また自らも行動し続けたいと思います。